

ギアリンクス便り 第8号 2004年7月発行

〒505-0051 岐阜県美濃加茂市加茂野町鷹之巣 343

ホームページ www.gialinks.jp

代表取締役 中田智洋 (株)サラダコスモ

取締役 大西 隆 (有)セントラルローズ

取締役 桜井芳明 桜井食品(株)

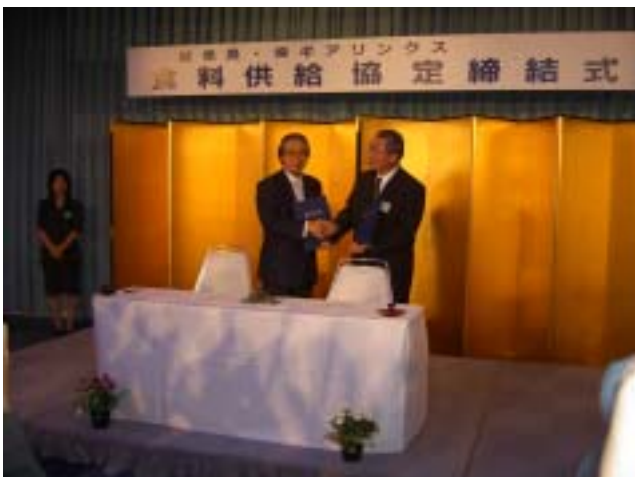
取締役 渡辺好弘 チュウノー食品(株)

取締役 加藤孝義 (株)岐孝園

監査役 渡辺基成 渡辺会計事務所

岐阜県と食料供給協定書を 結びました。

去る平成16年6月16日に当社と岐阜県の間で非常時における食料供給についての協定を結びました。内容は将来食料においての非常時が来た時にはギアリンクスは当社アルゼンチン農場で収穫された穀物を岐阜県内に優先的に供給するという内容です。食料の不足する日が来ないことを願っていますが、備えあれば憂いなしと言われるように万が一に備えた準備は怠りなくすべきであるという考えでの協定です。



協定調印後梶原知事と中田社長の固い握手です
当日は当社アルゼンチン農場で収穫された大豆を豆腐、煮豆、きな粉、納豆等々に加工された食品の試食会を「大豆収穫祭」と銘打って多くの株主様を始め、岐阜県内の大豆加工業者、生協を始めとした消費者グループの方々と共に行いました。国産大豆、アルゼンチン大豆、パラグアイ大豆の3種それぞれの大豆で作られた豆腐の試食を兼ねた産地当てクイズではそれぞれがおいしいこともあ

って93名の投票に対して11名の方が正解という結果でした。



テーブルには3国の大豆で作った豆腐があり、参加者で食べ比べをしました。

ガイアの夜明け(テレビ東京系)

8月3日放送決定！！

『南米大豆ロードをゆく～ニッポンの食糧を確保せよ』と題して、来る8月3日(火)午後10時からギアリンクスの活動が放映されます。

日本の食糧自給率の問題から始まって、ギアリンクスの設立経過から当社農場の様子、パラグアイの日系農家等々が放映される予定となっています。株主の皆様にはぜひご覧いただきたいと思います。

ぎふ和食文化フェアに出品します

来る8月6-7日 大垣市のソフトピアジャパンにて開催されます「ぎふ和食文化フェア」にアルゼンチン農場産大豆の豆腐等を出品します。お近くの方のお出かけをお待ちします。入場無料です。

アルゼンチン訪問記

参加者 竹本成徳さんの寄稿

地球の裏側にある日本から一番遠い国アルゼンチン、その首都ブエノスアイレスは私にとって子供の頃から特別の響きのある地名であった。いつかは行ってみたいと憧れの宿望でもあった。ギアリンクスの中田社長のお誘いでその機会を得たことは無上の喜びである。

広大なプラタ河口に面し400年の歴史を持つこの街は南米のパリと称されて、オールドタウンの商店街は古き良き時代のヨーロッパの趣向を凝らした格調の高い個性的な専門店が並んでいて好感が持てた。ブエノスアイレスという地名はスペイン語で“心地よい風”を意味することだこの地で初めて教わった。私も長い間、流通の仕事に従事したので、食べることに興味があった。一行20人の昼食に案内されたレストランは下町風情の所にあったが、前面のガラスはきれいに磨かれ、店内も整然、清潔、レイアウトも斬新で楽しかった。バイキング形式であるが本場の肉料理、魚、惣菜、パスタ、ドリンクとコーナー毎にまとめられ、ディスプレイも豊富で鮮度感に満ちていた。最も魅力的であったのは、各コーナーにそれぞれホットクッキングのサービスがあって腕ききのシェフが熱々のお肉や魚介を始め、オムレツやパスタまで提供してくれたことだ。腹いっぱい食べて飲んで勘定はびっくりするほど安かった。いくら美味しくても値段が高すぎるとは味は減殺される。安くて美味しいのが本当に美味しいものである。私は値段も味のうちと日頃からまわりの人たちに言っている。チェーン化された日本ではなかなかこんな店にはお目にかかれない。良き思い出の店となった。

入植時からの苦難を血と汗で乗り切り、立派に成功されている山脇さんの花卉園芸を視察した。都市近郊にあって、家族を中心としてまとまりのある手作業と労務の集約が成功の要因か。おむすび、味噌汁、漬物と心づくしの日本料理で歓迎を受けた。漬物のなすときゅうりの味は昔のままで日本では消えた味であった。感謝、感激。

名物のバス旅行（夜行長距離バス移動）はアンデス山脈や隣国チリに近いメンドーサに向かって約930kmを一気に突っ走った。漆黒の闇、ヘッドライトだけが流れる一本の道、深夜、コンビニのあるパーキングでひと息入れた。静寂と闇に包まれた夜の大地に、ここだけは電燈が明るく、行き交うドライバーたちの休息と談笑の場でもあった。夜が白み、日が昇る頃になると、見渡す限りの荒野である。どんなに土地が広くても水が無ければ無価値である。



深夜のドライブインで大豆の選別をしました。無事、早朝に目的地に着き、洗顔して、熱いコーヒーを頂いた。早々に、葡萄畑とギアリンクスがこれから手を入れる広大な畑地を視察した。葡萄畑の中の一軒家に暮らす家族、子供さん、犬たちなどの姿が忘れられない。葡萄の大敵は夏に発生するヒョウだと聞いて驚いた。収穫を左右する最大の要因が自然現象であることを再認識させられた。

この土地もアンデスの麓まではまだ150kmもあるが、すでに灌漑が施されていてアンデスの雪解け水の恩恵に浴することができる貴重な場所である。昼食をはさんで地元の日系の方々と交流した。今年初めてギアリンクスの畑で収穫された大豆を原料として、日本から持ち込んだミキサーで豆乳を作ったり、試食したのは今朝のことであった。甘さも十分あって良質な大豆であることを皆で確認して喜んだ。これを原料として作った豆腐を使って味噌汁や煮豆を作ったのは、80歳代の上品なお婆さんだった。郷里は岩手県とおっしゃった。集まった人の日系農家の大部分の方は葡萄酒用の葡萄を作っておられた。



アンデスの日系農家のブドウ畑にて

次に空路でパラグアイに向かったが、着いた空港はアルゼンチン側にあった。バスで国境の橋を渡る時、現地のガイドさんから、「向い側の電燈を見て下さい。そこで後を振り返って下さい」と言われた。確かに数は少なく、蛍光色の淋しい色をしていて、すぐに国力の差を読み取ることができた。パラグアイ入り口のイメージは貧しさと淋しさを感じたが、その晩の日本食レストランで明るさと暖かさを取り戻した。翌朝の散歩で地面に起伏があり、緑と花の庭園に囲まれた住宅を見て、貧しいかも知れないがパラグアイが好きに思えた。パラグアイでは3つの日系農協を訪ね、大豆や小麦の生産や、製粉工場などを見学しながら、最後の訪問地のイグアス農協へと向かった。

途中、中田社長ご推薦のドイツ人の経営するホテルで一泊した。街道に面したコロニアルスタイルの瀟洒な建物で、奥まって緑の木に囲まれた静かな平屋の宿であった。レストランではドイツ人の若い男女が10人位で輪になって躍動的なドイツの民族舞踏を見せてくれた。楽しい夕食であった。中田社長もさぞご満悦であったと思う。

いよいよ、最後の最大イベントがイグアスで待っていた。日本から寄贈された救急車の贈呈式が準備されていた。柱のない大きな屋根の建物には立派な看板と音響設備などが設置され、たくさんの椅子がところ狭しと並べられていた。多くの係員をはじめ、市民の方々も早くから集まって、地元のリマ市長、そして、政府代表としてのアントニオ農牧大臣がご到着されるのを今か今かと待っていた。飛行機の都合で若干遅れて始まったが、実に盛大で立派な式典を持つことができた。

ギアリンクスと日系の農協組織との交流を越え、地元住民の方々を巻き込んだ地域社会との交流、さらに日本とパラグアイの国家間の友好親善に大きく貢献する意義深いものとなった。大臣の祝辞、市長の感謝の言葉、日本政府を代表してパラグアイ領事館の前川領事の祝辞、日系農協代表者のスピーチ、中田社長の想いなど、それぞれ心に響くものがあった。この紙面で詳述はできないが、貴重な記録としてそれぞれの組織に残されることを希望したい。人はその行為のみで結ばれるものではない。中古の救急車とは言え、毎日手入れをされて高度な機能が整備された車を中津川市の好意と支援を得てプレゼントできたことは、気持ちと心の交流を生んだのである。皆で喜びたい。前消防署に勤務していた市川さんは一日余分に滞在して、救命術などの講習伝授をされたことも付記しておきたい。



救急車の贈呈式風景。

ついでのことながら私の記録に留めておきたいことがある。そのひとつは、イグアス農協の本部の入り口にある石碑に「この地が不耕起農業の発祥の地である」と刻まれていたことである。不耕起とは農地を耕さないことである。大豆や小麦をコンバインで収穫したら、そのままの状態にして次の種まきを行うのである。この農法は約20年位前から採用されたと聞いた。このパラグアイの密林に入植した日系の人々は手斧と手引きの鋸で、それはそれは大きな大きな大木を切り倒し、根を抜き、耕地を作ってきた。血と汗と貧困の中での肉体労働は苛酷であった。農協の廊下に展示された当時の写真は、この姿をリアルに写し出していた。それだけに、不耕起とコンバインは驚きであった。嘗農の大半は土を耕す

ことにあったことを思うと、投入される労働の軽減とコスト削減への貢献は実に大きいものがあったと思う。この地にあっては、水は天からの雨のほか頼るものはない。雨が少なれば不作、本当に水が命である。せつかく降った雨の水分を土壌ができるだけ長く保ってくれる、いわゆる保水性が大切である。土を掘り起こすことは地面を太陽と風にさらし水分の蒸発を促進することになるので、これを止めたことがこの新農法だと聞かされてうなずいた。聞けばそれまでのことと思うがここに至るまでどれほど長い、苦しい、重い歴史があったのだろうかと思像すると、道は単純で平坦なものではなかったと思う。あらゆる試行錯誤の上に築かれた農場であったに違いない。だからこそおおきな石碑に刻まれたのだ。果たしない大地、見渡す限りの地平線、想像を絶する広大な畑、刈り取り、種まきの時期は昼も夜も、24時間休み無く交替で機械を連続フル運転をするそう。自然を相手としながら大農業に挑む、日系の方々も男らしく逞しかった。色黒くて精悍、目は輝き、自信に満ちていた。どのご家庭も親子、夫婦が力を合わせて平和で幸せそうに思えた。人間の生きる営みが大地、空、風、水そして命の糧となる食糧の生産、その成育の喜びが一体となって織り成されるドラマを見るように思えた。言い知れぬ魅惑を感じるのである。

行く先々で、農場婦人部の皆さんには大変お世話になりました。何日も何日もかけてご準備いただき、本当においしい日本料理で歓待して下さいました。おにぎりや、おはぎ、おすしなど忘れられません。そして宴会になると皆さんは奥の方に引っ込んでおられた姿には日本女性のつつましさやかさと謙虚な美德を感じ、私の母親や姉の時代を思い出しました。

終わりに世界の名勝、イグアスの滝を見物しました。前夜はトップクラスのすばらしいホテルにくつろぎ、早朝の晴天に恵まれ、散歩スタイルで緑いっぱいの中森の中で鳥たちの鳴き声や、珍しい動物を見たりしながら滝へと歩きました。大、中、小のいくつもの滝はそれぞれが美しく朝日を映して輝いています。形も水量も異なってその姿に特徴が見られました。乾期に入った秋に見られる光景だそうです。

雨期では水量が多いという圧巻さこそあれ、細やかには欠けるそうです。悪魔の喉笛は、さすがにその轟音は腹に響き、滝壺に飛び散る水しぶきで大きな虹が何回も何回も見えました。チャンスと天気にも恵まれたイグアスの旅でした。

ご一緒させてくださった皆さんが、私ども初参加の者へのご配慮とやさしくしていただいたことに深く感謝いたします。私の人生にとっても最も感動の大きい旅でした。ありがとうございました。ギアリンクスのご発展と皆様のご健勝をお祈りいたします。

内田新哉さんのアルゼンチン紀行

詩画集の原画展のご案内

去る1月にギアリンクスの株主ツアーに参加された画家の内田さんと詩人の黒木さんの合作による詩画集の編集も大詰めに来ているようです。今回この詩画集に掲載された原画の展覧会が下記のスケジュールで決定しましたのでご案内します。農場を始めとした各所の風景を絵でご覧いただくのも風情があるのではと思います。

岐阜市 アクティブGにて

11月6日(土)～11月14日(日)

多治見市 多治見創造館 ギャラリー・オー工房

11月27日(土)～12月13日(月)

中津川市 中部電力中津川営業所 ギャラリー

12月15日(水)～12月21日(火)



アルゼンチンの大地より飛び立つ鳥たち。

早春に畑の土をトラクターで起こすと、トラクターのすぐ後ろに何百、何千というたくさんの鳥が集まってきて起こしたばかりの農地でミミズやオケラをついばんでいます。